

みせかけの民主主義しかない、本当の民主主義はこの国にはない」と話す冷静な口ぶりからは、いろいろな土地を渡り歩いてきた経験がH氏にそう語らせているような気がした。

中東アラブ世界は変動の最中にある。安全と平穏を求めて避難をしてきたさまざまな人々に対し、門戸を開き続けてきたヨルダンには、現在はシリアからの人々を受け入れている。シリア内戦は終わりの見えない泥沼状態

にあり、今この時も人々は戦乱の中を生き、日々尊い命が失われている。ヨルダンという隣国へ僅かな希望を託し、移動する人々の増加が今後も予想される中、この国はどのように舵を切っていくのか。H氏のいる報道の現場では、ジャーナリズムの役割と責任はどのように果たされるのか。多様な人々を抱えるヨルダンの、混沌と先の見えない未来を垣間見たような気がした。

カンボジアの森林保護区滞在記

鈴木 愛*

寒い。眠れない。森の中のハンモックの中で、体を丸める。ダンゴムシならきれいに丸くなれるのに、体の硬い自分はこの程度なのか。小さな生物の美しい姿を羨みつつ、可能な限り空気に触れる面積を小さくし、朝を待つ。調査地の年間最低気温は24度。冬といわれる時期であってもこのような寒さを経験することはないだろうと思い込んでいた。近くに設置されたハンモックもごそごと揺れている。みんな寒くて眠れないのだろう。朝、5時が過ぎた。あまりの寒さにフィールドアシスタントが焚火を始めたようだ。ハンモックから這い出し、マントのように体に巻きつけた毛布ごと焚火に向かう。小さな火を

調査チーム全員で囲んでいると、ようやく待ち望んだ暖かな太陽の光が届きだす。体が暖まる。みんなの顔が明るくなってくる。さあ、朝食を食べて、調査へ出発だ！

プレアビヒア森林保護区

私が滞在している森は、ラオスとタイと国境を接しているカンボジア北部のプレアビヒア州に位置する。プレアビヒア森林保護区と呼ばれるこの場所には、東南アジア大陸の多くの地域で消失しつつある低地林が残存している。生物多様性が高く、地球上の生物多様性保全を考えるうえでも貴重な地域である。特にオニトキ *Thaumatococcus gigantea* という大

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 1 保護区内に開通した道路と、道路の脇に並ぶ兵士の家族のための住居

住居は道路の両脇に並び、住居の奥には畑が広がっている。

型の鳥類にとっては、地球上で最後に残った重要な生息地のひとつとなっている。私がここを研究対象地域として選んだのも、東南アジア大陸部において、研究対象動物の個体数がまだ多く残っていると推測されている場所だからである。しかし、この場所にも経済発展に伴う生息地破壊の波は届き始めている。かつてはカンボジアの中でも人口密度が極めて低い場所であったが、近年の人口増加に加え、道路の開通やバイオ燃料用の農地開発とともに、人口流入が起こっている。

また、この森林保護区はタイとの国境紛争の火種である世界遺産のプレアビヒア寺院の近くに位置しており、その影響を大きく受けている。保護区内には軍の駐屯地があり、物資を輸送するための道路が開通し、兵士の家族には家と農業用の土地が与えられている(写真 1)。兵士は銃を持った密猟者にもなり、駐屯地近くの森に滞在していると、夜中によく銃声が聞こえる。密猟中の兵士は、保護区のパトロール隊に発砲することもあり、パト

ロール隊も命がけである。当然、私の調査チームにも、銃を携帯した警察官 2 名が入っており、24 時間行動をとともにしている。調査中に危険を感じたことはなく、大げさだと思うこともあるのだが、万が一の事件が発生した時、波及する影響を考えると、警察官なしでの調査は行なえない。

この保護区には今までほとんど研究者が入っていない。その理由はいろいろあるのだが、野生動植物保全に関わる研究者は今まで 3 人のみである。1 人目はオニトキの研究者であり、カンボジア人である。2 人目はカウンターパートのスタッフで、霊長類の調査を 4 ヶ月にわたって実施している。そして、3 人目となる私は、初めての外部者である。保護区の今後の研究の活性化のためにも、受け入れてくれた国際 NGO や森林局のためにも、事故に巻き込まれるわけにはいかないのだ。

楽しい調査もボーカークフェイスで？

銃を携帯する警察官 2 名を連れて調査せざるを得ない状況であっても、森の中での生活はやはり楽しい。朝の楽しみは、昇ったばかりの朝日に照らされた森を見ながら飲むコーヒーだ。ここの朝日の光は柔らかく、森を優しい色に包んでいく。カンボジアの景色として、一番初めに思い出す美しい景色である。コーヒーを飲んだ後は朝食だ。森の中の食事のメニューは朝、昼、晩、ほとんど変わらない。主食は白米、主菜も白米、副菜が干し肉や干し魚といった感じである。少しのおかずやプロホック（魚を発酵させたもの）で

大量の白米を食べるのがカンボジア流である。森に入る前に買い込んだ保存食が尽きると、その辺で調達したカエルの丸焼きが並ぶ。普段はベジタリアンの私も、ここでは何でも食べる（写真2）。

朝食を食べると、白米と干し魚などをビニール袋に突っ込み、調査に出発する。調査では動物の痕跡を探して歩き回る。もしかすると昨日、研究対象種が歩いたかもしれない森の中を歩いているとドキドキする。直接、動物を見ることができなくとも、痕跡だけで十分嬉しい。単純な思考の持ち主は、幸せを感じやすいのだろう。しかし、それは欠点にもなる。思考が表情にそのまま出てしまい、ポーカークフェイスが出来ないのだ。これが調査に思わぬ影響を及ぼした。この調査では、できるだけ多くの情報を集めることを目的としていた。そのため、調査チームの5人（私、カウンターパートのスタッフ2名、警察官2



写真2 森の中で食事をする場所を探す
手や食べ物を洗ったり、飲み水を補給できる水場で
食事をする。

名）がそれぞれの視点で森の中を歩き、それぞれの視点から得られる情報を収集する予定であった。だが、集まってくる情報が私の研究対象種の痕跡に偏り始める。おそらく痕跡の持ち主である動物の種によって、私の反応が明らかに異なっていたのだ。気づいた時には、もう手遅れだった。私の表情がチームの情報収集の形を変えてしまったのである。

その一方で、研究対象種の痕跡を見つけると、私は相当嬉しそうだったのだろう。その動物分類群に関する情報の量は格段に増えた。フンを見つけては分解して内容物を確認している私をうんざりした顔で見ていた警察官でさえ、数ヵ月後にはカメラの接写機能を覚え、貴重な痕跡の写真を撮ってきてくれるようになった。冷静に情報収集をしていたら、研究対象種の情報がここまで集まってくることはなかったであろう。

森の中の調査は楽しい。研究対象動物の痕跡を見つけると本当に嬉しい。しかし、この感情を表に出すことによって失うものもあるし、得るものもあった。言葉で「このような情報がほしい」と伝えることは簡単だ。しかし、本人の姿勢と表情は言葉より雄弁だ。言葉で伝えたことなどひっくり返してしまう。その時に必要な情報を考えながら、自分自身の姿勢や感情の見せ方をコントロールすることの大切さを痛感した。

酒と議論の夜

調査を終え、夜になると食事とともにスラーと呼ばれる40度のラオスの焼酎を楽しむ（写真3）。フィールドアシスタントによ

ると、スラーはクールな飲み物ではないそう
だ。金持ちや都会っ子はビールを好むら
しい。このスラーは、私の重要なコミュニ
ケーションツールでもある。言語オンチな私
は、動物の種名など調査に使用する単語以外
のクメール語を、なかなか覚えられない。言
葉を通して仲良くなることが難しいならと思
いついた苦肉の策が、スラーをともに飲むこ
とだった。ペットボトルで作った即席コップ
にスラーを注ぎ、一気に飲み干し、次の人へ
まわす。一緒にほろ酔い気分になって片言の
クメール語と片言の英語で会話し、大笑いす
る。この共有した時間から生まれる連帯感の
ようなものは、チームで調査をするうえで重
要な人間関係の基盤を作ってくれる。

大笑いした後は、真面目な議論に突入す
る。たくさんの時間を共有し、打ち解けてい
くうちに、流暢な英語を話すスタッフが本音
をぼつぼつと話すようになってくれたのであ
る。彼は12年間、保護区を見てきたスタッ



写真3 ペットボトルに入れたラオスの焼酎スラー
植物やムカデなどを入れることもある。

フであり、ここの森のことは誰よりもよく
知っている。彼の懸念は、保護区内で増加す
る違法行為と動物の個体数減少である。彼
によると、以前は1週間森に滞在していても、
人と会うことはほとんどなかったそうであ
る。現在、調査をしていると毎日人に出会
う。密猟や違法伐採の規模を肌で感じる。彼
との議論のほとんどは、保護区の保全につい
てである。議論中は互いに絶望感や無力感に
打ちのめされ、長い間、無言になることもあ
る。保護区をずっと見てきた彼の悔しさが痛
いほど伝わってきて、涙ぐんでしまうことも
ある。満天の星空の下、毎晩、暗い雰囲気にな
ることもなかったのだが、なぜか議論しな
いではいらなかったのだ。民族を超えてつ
ながる同じ願い。2人で共有することで、無
力感は割り算で半分に、希望は掛け算で2
倍にしたかったのかもしれない。

ハンターの願い

カウンターパートのスタッフが懸念して
いる動物の個体数減少は、森林保護区内や
保護区近隣の村のハンターたちも感じて
いるようだ。あるハンターによると、昔
はトラ *Panthera tigris*、アジアゾウ *Elephas
maximus*、ガウル *Bos gaurus*、バンテン *Bos
javanicus* などの大型哺乳類が多く生息して
いたが、今では以前と比較すると少なくなっ
ているという。この情報の信憑性について
は、昔の個体数の情報が不足しているため、
現在の個体数のデータを取っても個体数の動
向を確認することはできない。しかし、いく
つかの村で多くのハンターが同じように減少

を感じているので、個体数はやはり減っているのかもしれない。

動物の個体数減少を感じていると答えたハンターのひとりに、私の調査において重要な情報提供者がいる。彼は人懐っこく腕のいい若いハンターであり、動物に関する知識が豊富である。彼はインタビューの最後に何かを伝えてきた。クメール語をあまり理解できない私は、トラと森に関する話だということだけ察し、まっすぐに私の目を見て伝えてくる彼の目から思いを受け取る。

彼の話が終わり、通訳が入る。「俺はコープレイ *Bos sauveli*（絶滅した可能性がある大型哺乳類）を見てみたかった。俺の子どもたちにはこういう思いはしてほしくない。子どもたちにはトラがいる森を見せたい。」彼

の目から届いた気持ちと時間差で、彼の言葉が心に突き刺さる。トラを例に挙げたのは、私の研究対象動物の一種がトラだと彼が知っているだけではない。絶滅の可能性が示唆されているコープレイと、ここ数年、痕跡をほとんど見ていないトラとを重ね合わせているのだ。彼の膝の上に座る子どもは、この森にも昔はトラがいたと教えられる初めての世代になるのだろうか。ハンターである彼と、保全活動に従事するカウンターパートのスタッフの懸念は同じだ。自分はここで何をやるべきなのか。どのようなスタンスで研究をすればいいのだろうか。状況を知れば知るほど迷ってしまう。答えはまだ出ていないが、求め続けたい答えがあるからこそ、きっと研究はおもしろいのだろう。

室内を彩る多様なクルアーン装飾品

二ツ山 達 朗 *

チュニジアの室内に飾られている装飾品の約40%はクルアーンに関係するものである。このような数字からも、クルアーン装飾品がムスリムの生活にいかに浸透しているかが理解できる。本報告では、これらの装飾品がどのようなものであるかということを、チュニジアを事例に紹介したい。

クルアーン装飾品を含めた、イスラームの宗教グッズ (religious commodities, religious goods, religious things, religious items) を対象とする研究が1990年代から盛んになされている。グローバルな市場経済や消費文化が浸透するにしたがって、クルアーンなどの聖句が記されたものが商品化されて消費されて

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科